

---

# 幸福増進剤

3 2 8

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸福増進剤

### 【Nコード】

N3054Z

### 【作者名】

328

### 【あらすじ】

家庭は裕福で何不自由なく育ったはずの19歳の男の子が家を飛び出し、

友人の紹介で夜の世界で働くことに・・・

まともに仕事もしたことのなかった彼だったが、

なかなかの気品のある顔立ちと得意とする嘘と偽りの笑顔で

大金を稼ぐようになった。

その代償に大金を稼げば稼ぐほど  
彼の心は荒み、汚れ、壊れていった・・・

そんなある日、  
『幸福増進剤』という奇妙な薬を職場の先輩から  
もらった。

彼の人生が大きく変わり始める・・・

この物語はフィクションです。

## 処方箋

、幸福増進剤、

k o u f u k u z o u s h i n z a i

幸せを増進させる薬。

## 処方箋

使用・服用方法

1週間に2回まで服用できます。

1度服用したら次の服用までに  
3時間はあけて下さい。

炭酸飲料でお飲み下さい。

## 効能・効果

幸福そのものを与えるものではなく、不幸、苦痛などをやわらげる薬です。

## 副作用・注意事項

幸福な人は服用できません。

アルコールで服用しないで下さい。

間違った用法・用量では、効果が期待できなかったり、副作用がでることもあります。

## 保管方法

直射日光を避け、冷蔵庫内で保存して下さい。

吉井慶太（19）

俺の家は、他人から見れば「幸せ」「裕福」「金持ち」

こんな感じだと思う。

実際、俺は「幸せ」とは思っていない。

だが、不幸とも思わない。

人生がつまらない。

一生このまま生きていくのだと思うと  
嫌でたまらなかった。

だから俺は黙って家を出た。

治安のいい街ではなかったから、世間一般で言う悪い仲間って奴も

沢山いた。

その中で1番仲が良かったのが峯岸拓真。

こいつは、情に熱く涙もろくていい奴で俺は好きだった。

俺が悩んでいたたり、落ち込んでいたりすると一番に気付いてくれる  
そんな奴だった。

家を出てすぐ拓真に電話し、簡単に家出の説明をしたら

しばらく拓真の家に住めることになった。

拓真は中学の頃に両親を亡くしてから  
ずっと一人暮らしだった。

そんな拓真の家は、不良の溜まり場、そんな感じだった。

拓真の家に住み一ヶ月近く経った頃だった・・・

「腹減ったなあー」

「やばいな、俺もつお金尽きた」

「稼げるバイトねえかなー」

「遊んでお金もらえりゃいいのに」

そんなくだらない会話から拓真と俺は  
夜の世界で働くことになった。



## ホスト

拓真の先輩のSHINさんの紹介で、'ageha'という店でしばらく働かせてもらうことになった。

出勤初日はこの店のナンバーワンの誕生日だったみたいで出勤して三時間くらいで拓真も俺も潰れてしまったが、

翌日からは繁華街を歩く女性に声をかけて、店に上げて嘘八百をならべて心にもないようなことを言ったり、笑顔をつくりSHINさんの教え通り接客をした。

正直、楽だと思った。

俺は一ヶ月も経たないうちに大金を稼ぐようになっていた。

楽しんでナンバー3になった俺は

「本気出したらナンバーワンなんて余裕だな」

と完全に自惚れていた。

その翌日から俺はプライベートの時間も削りながら、客へのメールや電話、休日デートなどできる限りの事をやってみた。

翌月、俺はナンバー2になった。

できる限りの事はやったのに・・・

「なんでなんだ・・・？」

苛立ちを隠せなかった。

拓真の家に帰り気持ちを落ち着かせた。

「慶太？そんな落ち込むなよー」

「うつせえーよ」

「ナンバー2でもスゲーって！」

「一番じゃないと何の意味もねえーから」

どうしても一番になりたかった俺は、  
抱きたくもない女を何度も抱き高価なボトルやシャンパンを  
次々と入れさせた。

破産させた客も何人かいた。

当時の俺は自分の欲を満たす為なら  
手段を選ばない最低な人間になっていた・・・

あいつが逝ってしまっまでは・・・

峯岸拓真（19）

「いつてくる!!」

「おお・・・」

最近慶太に元気がない。

仕事はいつも以上に頑張っているみたいだけど、俺は心配でたまらなかった。

あいつは凄いと思う。

入店して一ヶ月そこらでいきなりナンバー入りするし、三ヶ月でナンバー2なって半年経った今でも、ナンバー2の座を維持している。

俺にとって最高で最強の自慢の友達だ。

ナンバー入りしてない俺は、店の掃除やお酒の発注の手伝い、テーブルのセッティングをするのも仕事だから慶太より早くいつも店に出勤している。

「おい！拓真！」

「あつ！SHINさんどうしました？」

「なんかお前顔赤くねえーか？」

「そういえば何か熱っぽいような・・・」

「大丈夫かー？風邪薬か何か飲んだか？」

「薬なんか飲まなくても大丈夫つすよ！」

「そうか？」

SHINさんは俺の大切な先輩で、危ない事もするし、口も悪いけど俺が中学の時、父親が母親を殺して自殺し、俺は荒れていた・・・誰だろぅが関係なく喧嘩を仕掛けては暴力を振るっていた。

12

そんな時、喧嘩を仕掛けた相手が運悪くヤクザだった。ヤクザ数人に囲まれて覚悟を決めた時、近くを通りかかって見かねたSHINさんがこんな俺の事を助けてくれた。

俺は可哀想って言われるけど全然可哀想だと思わない。

こんなにいい人が周りにいるんだから。

俺は幸せモノだと思う。

ゾロゾロとみんな出勤して来てお店が開店した。

慶太はいつも同伴出勤だからまだお店には来ていない。

俺は盛り上げ役だから今日もテンションを精一杯上げて接客に挑む！一発目はSHINさんの客のヘルプについた。

「いつらしゃーい！」

「あー！拓真じゃーん！」

「ミサちゃん久しぶだねー」

「だねー！SHINは？」

「ごめんねーもうすぐ来るからー」

「んーもうー！！」

俺はこういうタイプの子は少し苦手だ。

「あつ！SHINー！」

「いらつしゃい、久々だねー」

「んじゃ、俺はお邪魔しますねー」

「早くどっか行つてよー」

「はいっ！失礼しますー」

席を立ち次々と来店する客のヘルプについて、

しばらくしてSHINさんにミサの席に呼ばれて行った。

「あー！ホントだ！熱っばいねー」

「だろ？」

「大丈夫ですよっ」

「えーっと、あつた！はいコレ！」

「なにになに？」

「ミサね、いろんなお薬常備してるからあげるよ」

「ありがとう！解熱剤？」

「うーん！痛み止めみたいなものかな？」

「早いうちに飲んで早く治せよー」

「ありがとうございます！んじゃ。」

ミサは精神的な病気で常に色々な薬を持ち歩いている子だった。

俺は、貰った薬をすぐに飲んだ。

30分くらいして足元がフラつき始めた。

「・・・そんなに酒飲んだかな？」

深夜三時にもなると、いつも店は客でいっぱいになる。

新規の客について珍しく指名をもらった。  
今日は何だか気分がよく、会話が弾んだ。

向かいの席にいた慶太と目が合い慶太は  
俺を見てニツコリと笑った。



最近慶太の本当の笑顔を見ていなかったから  
ホッとして、笑顔がこぼれた。

早朝五時・・・

俺の指名客は帰り、酷い睡魔に襲われた。

「俺、少し寝るから、店閉める時起こしてくれ」

俺は新人の子にそう言って眠りについた。

犠牲者 峯岸拓真（19）

早朝六時を回った頃・・・

「あー！やっと終わったかー」

客も全員帰り俺はソファーにもたれ掛かった。

ネクタイを外しながら周りを見渡した。

・・・あれ？ 拓真がない・・・

いつも仕事が終わったら、一番にとびついてくる奴なのに・・・

近くで片付けをしている新人に声をかけ聞いてみた。

「おいつ、拓真は？」

「あつ、拓真さんならVIPルームで寝てますよ」

「そうか・・・疲れてんのか。」

「あつ、俺・・・起こしてきます！」

「いいよ、俺が起こすから。」

俺は新人の言ったとおり店のVIPルームへ  
拓真を起こしに行った。

拓真が一番大きいソファーに横になり  
微笑みながら静かに目を閉じていた。

「拓真ー、帰るぞー」

相当疲れてるのか、寝息一つ立てずピクリともしなかった。

「拓真ー、帰るぞー」

拓真の耳元に近づき大きな声で呼んでも何の反応もなかった。

何かおかしい・・・

そう思った俺は、拓真を揺すった。

予感的中し、拓真はソファーから落ちても何の反応も示さずに微笑んだままだった。

「おい！拓真！拓真！拓真！！」

そう何度呼んでも揺すっても拓真は目を覚まさなかった・・・

「おい、どうした？」

俺の大きい声にSHINNさんが中を覗き込んできた。

SHINNさんは拓真を見て血相を変えてすぐさま拓真を抱きかかえ呼吸しているかを確認した。

SHINNさんは大きい声で

「おい！誰か、救急車を呼べ！！」

と叫んで拓真の頬を叩き起こそうとした。

俺は現実を受け止められず、抱きかかえられた拓真を呆然と見つめていた。

来た救急隊員によって拓真は救急車に乗せられた。

SHINさんの車で俺とSHINさんは救急車の後について一緒に病院へと向かった。

病院に到着し、すぐ医者と呼ばれ俺とSHINさんは説明を受けた。

「・・・残念です。」

「は？なに言ってたんだ？拓真が死ぬわけねえだろ？」

「落ち着け！」

「ふざけんな！あいつは死なねえーよ！」

叫び狂う俺をSHINさんは無理やり外へ追い出した。

後でSHINさんに聞いた・・・

拓真はアルコールの過剰摂取によって死亡したと・・・

翌日から拓真の葬儀、葬式が行われた。

拓真には親戚も家族もない。

俺とSHINさんが費用を出し合い寂しがりやの拓真の為に  
知っている限りの拓真の友達全員に声をかけ呼び集めた。

拓真には数えきれないくらいの友達がいたんだな。

みんな泣いていた……

拓真はいい奴だからな……

あたりまえだよな……

羨ましいよ……

お前にはこんなに沢山の友達がいたんだな……

俺には……本当に大切な友達は、お前しかいないのに……

俺、これからどうすればいいんだ？

なあ、拓真……なんで死ぬんだ……

なあ、なんで拓真なんだ……？

拓真じゃなくてもよかつただろ……？

俺が代わりに死ぬから、頼むから……

拓真を生き返らせてくれよ・・・

俺の願いは虚しくも叶うことなく時間だけが過ぎて行った。

犠牲者1 峯岸拓真(19) 終。

木村真也（26）

俺は、木村真也、通称SHIN。

職業は、ホストクラブ、agehaの店長。

一ヶ月前、俺の可愛がっていた後輩の拓真が亡くなった。

拓真と仲が良かった従業員の慶太は、まだ拓真の死を受け止められないようだ。

俺も、みんなだって辛い。

今日も店に笑いながら出勤してくるんじゃないかと思う。

でも、俺たちがこんな気持ちのままじゃ拓真も安心して天国に行けないだろうと思う。

慶太は拓真が亡くなってからどんどん売上を伸ばしている。無茶苦茶なやり方で怯えている客もいるみたいで心配だ。

「今月のナンバーワンは慶太で決まりだな。」



「無茶苦茶なやり方しますね」

「ああ、心配だ。鏡夜、お前も抜かされねえようにな」

「わかってますよ」

この店のナンバーワンの鏡夜は店の売上の半分を占め、ホスト界のカリスマ的存在で、鏡夜目当てでわざわざ県外から訪れる客もいるくらいだ。

今日も店内は賑わっている。

俺の客も徐々に増えて忙しくなってきた。

ミサが一ヶ月ぶりにお店へ来た。

「やつほー、SHINER」

「おお、いつらしゃい。」

「さっき違う人がヘルプで来たけど拓真お休みななの？」

「ああ……」

ミサには拓真が亡くなった事を言わなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3054z/>

---

幸福増進剤

2011年12月12日00時45分発行